essay

彼岸花の旅

西村 幸夫

仕事がら、調査や会議、講演のために日本各地を訪れることが多いのですが、その折、車窓から垣間見る風景に季節の転変を実感させられることがよくあります。

なかでも彼岸花は、その印象が強い花です。長い夏の終わり、体も疲労を蓄積させているころに咲く濃く赤い花は、あるいは毒々しく、あるいは力強く、目に突き刺さってきます。

そのうえ、東京に暮らしていると通勤途上でこの花を目にすることはほとんどありません（これまで私が東京都心で唯一彼岸花を目撃したのは、三宅坂あたりの皇居のお堀の斜面だけです。私の観察眼が貧弱なだけかもしれませんが……）。そのぶん、旅の途上で見かける彼岸花の印象は鮮烈なのです。

彼岸花の時期、列車の窓から気をつけて田園風景を眺めることが、ずいぶん以前から習慣になっていました。

すると、おもしろいことに気づきました。

私の植物知識の乏しさをさらけ出すようで恥ずかしいのですが、彼岸花が咲いている場所には規則性がほとんどないのです。大概の植物は、同じような環境に同じような姿で生育しているものですが、彼岸花にはそれが感じられません。ここにはみごとに群生しているのに、すぐ近くの畦道にはまったく見られない、ということが普通なのです。

さらに観察を続けていくと、原野や山林にはほとんど見られないことに気づきました。田畑の畦道や川の土手など、人の手が加わった自然にばかり咲いているのです。不思議なものです。長い間、私にとってこのことは小さな謎でした。

そんな謎が、あるとき、はらりと解けたのです。

彼岸花は遺伝的には三倍体といって、種子を稔らせることがないというのです。ですから、増やすには株を分けるしかないようで、大陸から渡ってきた一株の彼岸花が株分けによって日本全国にひろがったらしいのです。

なんらかの理由で海を渡ってきた株が、多くの人の手を経て、分身を日本じゅうの田舎に帰化させた――なんとロマンチックな物語でしょう。この花が田んぼの畦に多く山中に少ないことも、同じ里地でも偏りがあることも、これで納得がいきます。植物好きの人には当たり前の話かもしれませんが、長年都市を追いかけてきた者にとっては、これは新鮮なおどろきでした。

一輪の彼岸花にも、共通の祖先へつながる遠大な旅の物語の記憶が宿っているとしたら……。晩夏、私の目はさらに車窓から離れられなくなってしまったのです。

絵・村上康成

にしむら・ゆきお／
東京大学教授・工学博士

東京大学都市工学科卒、同大学院修了。コロンビア大学客員研究員、フランス国立社会科学高等研究院客員教授などを歴任。専門は都市計画、都市保全計画、都市景観計画、市民主体のまちづくり論など。おもな著書に『西村幸夫風景論ノート』（鹿島出版会）、『都市保全計画』（東大出版会）などがある。